FOOTSTEP

JLMM 25年の歩み

【当時のお名前を掲載させていただき、敬称は略させていただきます。●は出来事、▲は派遣、○は養成・研修、■は人事に関することをまとめました。西暦の表示は年度です】

1977

●M.シーゲル師が南米に派遣されたいと希望する信徒と出会い、信徒宣教者会の構想を描く。

●徳永瑞子が信徒宣教者の組織作りのため、ザイールより帰国

1978〜1981

M.シーゲル神父

●シーゲル師が各国の信徒宣教者会を訪問してまわり、日本で信徒と共に信徒宣教者活動促進会をつくる。

1982

▲促進会から最初の派遣者、東京教区・吉祥寺教会の渡辺真美が四月に派遣される。イギリスで一年半英語を勉強した後、VMM（ボランティア・ミッション・ムーブメント）にて養成され、一九八三年九月にジンバブエに派遣された。ジンバブエ北部のメリーマウントで、高等学校の教員として働く。

JLMM 25年のストーリー

STORY

出会い

一九七七年のある夏の日。

東京・吉祥寺教会の助任司祭であったM.シーゲル師（真言会）のもとに、二人の青年が訪れた。

青年たちは「南米で二年間くらい、ボランティア活動をおこないたい」と言う。動機は「外から、特に貧しい人の立場から日本を見つめなおしたい」というものであった。

シーゲル師はここで、二人の青年に対し、「青年海外協力隊」への参加を勧める。しかし、二人は「信仰をもとに」、「教会を中心とする活動」に関わりたいという強い希望をもっていた。結局、この青年たちは海外に行かず、普通に就職していったという。

シーゲル師はこれを特別に大事な出会いだと思った。「日本を見つめなおすこと」「自分が変わること」「現地から学ぶこと」「人間の本質に触れること」といった異文化における生活や活動の意義について考え始め、「国際的共同体づくり」「人材派遣による第三世界の人びとへの援助」「日本の教会にとっての意義」「宣教活動としての意義」「その思いを広げていく。

思いがつながる

ちょうどその頃、一九七一年以来旧ザイールで修道会の在俗宣教者として医療活動に取り組んでいた看護師、徳永瑞子さんが日本に一時帰国し、日本における信徒宣教者組織を呼びかける。この時点では組織づくりが実現せず、徳永さんはザイールに戻るが、シーゲル師との交流の中で、何名かの信徒が集い始め、第三世界の状況や文化に関する学習会が行われるようになる。

八〇年代に入ると、内戦下のカンボジアから数十万規模の難民がタイ国境に逃れ、日本のメディアでも報道される。これを見た若者たちがタイに向かい、ボランティア活動に参加したことが、現在の日本の国際協力NGO誕生のきっかけとも

1983

派遣者第1号の渡辺真美

▲フィリピンのイラガン教区でボランティア活動をしていた横浜教区・藤沢教会の**山口道孝**が、促進会によって派遣される（十一月）。

●「信徒宣教者活動促進会」が日本カトリック司教協議会で認可を受け、国際協力委員会の下に置かれる（十二月）。

■担当司教に濱尾文郎司教、指導司祭にM・シーゲル師が着任。事務所が国際協力委員会内に設置される。

なった。当時タイのサケオ・キャンプ、タイ・カリタスの子どもセンターでボランティアとして働いていた信徒、山科幸定さんは、「単なるボランティアではなく、カトリック教会から派遣されるグループ」について考える。難民キャンプのような緊急時の活動だけでなく、アジアの教会で働くべき場所はたくさんあるはずだと感じ、シーゲル師の構想に参画する。

活動のための組織づくり

「信徒として海外で働きたい」という希望者がいること、その希望者の夢をかなえるにはどうしたらよいだろうという思いから、「信徒宣教者活動促進会」が結成される。事務局が設置され、①信徒の派遣を準備すること、②派遣された信徒を援助すること、③帰国した信徒を援助することの三つの柱を主たる目的として活動がスタートした。

派遣先を見つけることは当初困難を極めた。派遣希望者の希望と、現地のニーズがうまくマッチングしない。英語またはフランス語での意思疎通が難しい場合、派遣先の可能性が極端に限定されてしまう。現地視察などを通して派遣先の開拓に取り組んだ。③の帰国した信徒の援助に関して、プログラム化される前に、促進会は解散となった。国際協力NGOといった活動がまだほとんど無い時代、手探りで方法論を模索した。派遣地への金銭的な流れはなく、派遣者の生活費を第

1984

▲**石川裕之　フィリピン派遣**
イギリスへ語学研修とVMMにおける養成のため出発（四月）

▲**出崎慎也　パプア・ニューギニア派遣**　アイルランドへ語学研修に出発（十一月）

▲**吉田隆　フィリピン派遣**
（個人ボランティアとしての活動を、促進会からの派遣によって継続。十一月）

○初の養成コース　開催（三月、五日間）

●後援会が設置される

第一回派遣式

1985

●事務所開設（横浜教区カトリックセンター）

▲**近藤修子　西サモア派遣**　オーストラリア語学研修に出発（十一月）

▲**米沢洋一　マカオ派遣**

三世界の教会から提供してもらうという方針だったため、受け入れ先探しは難しかった。しかし、「そのような受け入れ先では日本の信徒宣教者が大事にされ、生き生きと生活して現地の人びとのレベルで交流ができた（山科幸定・和代夫妻談、一九八四年から八八年まで事務局スタッフ）」という。

派遣が始まる

一九八二年、東京教区・吉祥寺教会の渡辺真美さんが、派遣者第一号として、四月にまずイギリス（出発。一年半英語を勉強した後、イギリスの信徒宣教者会VMM（ボランティア・ミッション・ムーブメント）で養成を受け、一九八三年九月にジンバブエに派遣される。

この頃、横浜教区・藤沢教会の山口道孝さんは、フィリピンで数十教会をまわり、大土地所有制によって搾取される小作人たちの状況に触れていた。日本のカトリック教会では、正義と平和協議会の活動が活発であり、フィリピンのカトリック教会との連帯が特に意識されていた。教会の役割、チームワーク、人びとのために働く教会というものについて考えさせられ、影響を受けた。山口さんが自力でボランティア活動を行っていた時、シーゲル師と出会い、一九八三年三月からは、促進会からの派遣という形でフィリピンでの活動を継続する。

看護師　近藤修子（西サモア）

●初のチャリティ・コンサート開催（ハープ・バイオリン・ピアノ演奏、二月二十日）
○養成コースを二十四日間に拡大（九月二十八日～十月二十二日）
●毎月の例会を実施（四月から）。横浜カトリックセンターと名古屋のロゴスセンターの二カ所で開催。
●合宿形式の説明会・面接選考を実施（二月十五日から十六日、ザビエルセンター）
■顧問に梶川宏師、粕谷甲一師が着任
■フルタイムの事務員　牧野和代着任、渡辺真理子退任
スタッフは中野真理子、シスター金森
●第一回理事会（七月十四日・中央協議会）基本方針の検討
●「信徒宣教者だより」第一号創刊（六月）

日本の教会の活動として

一九八三年十二月には、促進会が日本カトリック司教協議会で認可され、同協議会国際協力委員会の下に位置づけられる。事務局が同委員会の中に設置される。濱尾文郎司教が担当司教に、シーゲル師が指導司祭となる。

濱尾司教は、一九七四年頃（当時東京教区補佐司教）から、FABC（アジア司教協議会連盟）との連携が始まり、日本の戦争中の軍事侵略や、戦後の経済的進出によるアジア・太平洋の加害者であり続ける日本が、少しでも奉仕する国となるきっかけとなればと宣教会設立を考えていた。一九八〇年横浜教区に移ってからは「横浜宣教会」設立を構想するが、実現には至らなかった。そこにシーゲル師から信徒宣教会設立の提案があり、当時国際協力委員会の委員であった濱尾司教（委員長は石神司教）は委員会での担当者となり、その設立が司教総会で承認された、という経緯がある。

シーゲル師をはじめ促進会は、全国各地の教会での説明会、修道会・宣教会の管区長に説明してまわり、協力者を募り、活動支援を願った。特に日本で宣教活動を行っている外国宣教会が、この「日本からの宣教」の動きに対し、積極的に支援した。翌一九八四年には後援会が設置され、組織

●資金づくりのため、小教区のバザーに出店参加を開始

1986

▲高橋ユリ　西サモア派遣　オーストラリアへ語学研修
▲長島美詠子　西サモア派遣　ニュージーランドへ語学研修
▲有田由佳　フィリピン派遣
▲吉田勉　パプア・ニューギニア派遣　オーストラリア語学研修
▲片山久史　フィリピン派遣
●「信徒宣教者の家」開設。（八月。神奈川県葉山、養成のための宿泊施設として一九八七年四月松原への移転まで使用）
●養成コースに海外に派遣準備中の修道女が参加（信

長島美詠子（西サモア）

的・継続的な支援のシステムづくりが始まる。一九八五年には、国際協力委員会のデスクを離れ、横浜教区カトリックセンター内に促進会独自の事務所を設置（五月）、牧野和代さんら専任スタッフが事務を担う。顧問に梶川宏師、粕谷甲一師が着任し、七月に第一回理事会が開催される。ニュースレター「信徒宣教者だより」を六月に発行開始、横浜カトリックセンターと名古屋ロゴスセンターの二カ所で月一回の例会を実施、合宿形式の説明会・選考が実施されるなど、運営・広報・募集など組織としての基礎が形成された。

養成コースが始まる

一九八四年に促進会が日本国内で初の養成コースを企画する。三月末からの五日間。石川裕之さんが参加し、このコースの後イギリスのVMMでの養成を加えてフィリピンに派遣された。同年十月には九日間の養成コースが実施され、参加した出崎慎也さんはこの後アイルランドでの語学研修に出発する。フィリピンで山口さんとともにボランティア活動をおこなっていた吉田隆さんも、この研修に参加し、促進会からの派遣としてフィリピンでの活動を継続した。一九八五年は二十四日間、一九八六年は四十日間と、養成コースの内容も毎回検討が加えられ、より充実していく。

徒九名、修道女五名の計十四名。）

1987

●事務局と研修所は東京松原教会内の淳心会の旧学生寮へ移転（四月）

●**名称を「カトリック信徒宣教者会（Japan Lay Missionary Movement）」に変更**（四月）

●派遣式　派遣者それぞれの小教区にて開催

▲**中島淳・順子・真菜・優　ネパール派遣**

▲**秋永秀子　フィリピン派遣**

▲**政本純　パプアニューギニア派遣**　オーストラリアへ語学研修に出発

▲**田代久美子　フィリピン派遣**

高橋ユリと学校の生徒達（西サモア）

八六年以降は、海外宣教に派遣される各会からの修道女たちが養成コースに参加し、同じ宣教者として交流し共に学ぶことによって、派遣の準備がより豊かなものとなった。

教会の働き手として

国際ボランティア、NGO（民間非政府団体）という言葉が日本の社会で使われ始める。一方で、「信徒宣教者として海外に行く人は、あくまでも宣教者であり、単なる開発ボランティアではありません。かならず、第三世界の教会の要請に応じて派遣され、その教会の人びとと共に、そのチームの一員として活躍します。（M. シーゲル担当司祭、「信徒宣教者だより（以下、「たより」）第1号」）」とJLMMの派遣者は、教会の働き手となることがその原則とされた。

では、その使命とは何か。

「教会の動きを見ますと、宣教者というものが従来のカトリック国から非カトリック国にキリスト教を伝えるという姿勢から、新しい動きに変わりつつあります。それは、キリスト教国からどこへ、という考えではなく、異なる民族、異なる文化の人びと同士が相互に助け合う交流を通して、国家や民族中心主義を越えた地球的発想をもって互いに出会うということです。『信徒宣教者』の存在も、このような二十一世紀の新しい世界、新しい教会をつくる一つの重要な動きです。第

■事務局長に徳永瑞子着任。五月以降は、帰国者の吉田隆、石川裕之、事務局員の牧野和代が運営の中心を担う。（信徒による運営への移行と、帰国者の役割の拡大）

■A.ブルカルト師（オリエンス宗教研究所所長）が担当司祭代理

●事務所の業務を海外課（要請班、海外ケア班）、国内課（総務班、国内ケア班）に分化し、より機能的な運営を試みる。

1988

▲**有川憲治　フィリピン派遣**

▲**斉藤知子　フィリピン派遣**

■吉田隆　事務局長（四月から十二月まで）、島事務局員四月着任

1989

○初のフィリピン体験学習（八月十五日～二十九日、九名参加）

●国際交流の集い（八月十二日、十七カ国から六十三名参加）

ブラザー・レイモンド

二バチカン公会議の後、世界各地に生まれました。日本ではまだ生まれつつあるという状態です。（「信徒宣教者の使命」濱尾文郎担当司教、「たより」第1号）」新しい世界の構築とともに、新しい教会づくりというビジョンの中に、信徒宣教者の運動体が位置づけられていく。

現地体験の分かち合い

「この遣わされたものこそが、自分と人びとの命の価値を発見させてくれるものであろう。（梶川宏師、顧問）」

派遣された信徒が、現地でまず何を見、感じ、考えたのか。派遣者第一号の渡辺真美さんから手紙が届いた。「自分の人生が、これからどんな道をたどっていくのか、見当もつかないけど、わからぬまま、すべてを超えてみ旨の行われんことを。」このニュースレターを通して日本の教会に分かち合われる。この一人の信徒の思いとともに、彼女が活動する施設に四百人規模の難民キャンプが設置されたという現実が報告され、ジンバブエにおける、内戦と飢餓によるモザンビーク人難民問題（十万人）が伝えられる。派遣された信徒を通して、世界の状況が具体的な体験の分かち合いとして日本の人びとつながっていく。

▲千葉博子　ネパール派遣
●「JLMMを考える集い」開催。一月十三日～十四日、一時帰国中の派遣者三名、帰国者二名が集う
○アジア学院農業研修（七月から一ヶ月間、ワーキングビジターとして）
■担当司祭兼事務局長　野村昌樹師が着任（四月）
■事務局スタッフ　長島美詠子四月着任、千葉久美子十一月着任、島知史三月退任
■事務局スタッフ　ブラザー・レイモンド海外視察（五月から七月）
●規約草案作成

1990

▲斉藤政行　西サモア派遣　オーストラリア語学研修に出発
■事務局スタッフ　木村たつこ四月着任・三月退任、吉田勉七月の帰国から二月まで着任。

有川憲治と事務局スタッフ（フィリピン）

共に生きる

「彼らと時を共にしたとき、彼らの笑顔を、そして涙を見たとき、僕は真実を気づかされたのです。『人はみな、同じ。』主イエズス・キリストが私たちと共に生きてくださったということは、私たちに『共に生きなさい』と教えてくださっているのではないでしょうか。そしてすべての出発点が、そこにあるような気がします。『共に生きる』というところに。（出崎慎也、「たより」第3号）」派遣者のパプアニューギニアにおける体験からの気づき。この「共に生きる」という姿勢、ありかたがJLMMの中心的なテーマとしていつの時代も、どこの派遣地においても大切に継承されている。

信徒の運動体として

「ただ、人間として分かち合うことこそ、宣教者の生き甲斐だ。（A.ブルカルト神父、「たより」第4号）」

運動体の運営を信徒が担っていくことは、シーゲル師の当初からの願いでもあった。一九八七年一月から五月まで、事務局長にザイールから帰国した信徒、徳永瑞子さんが着任する。事務局では山科幸定さん、石田景子さん、石田えり子さんらがシスター長谷川とともに業務にあたる。五月以降は、フィリピンから帰国した吉田隆さんと石川裕之さん、事務局員の牧野和代さんが運営の中心を担った。帰国者が日本の事

○派遣希望者面接員にカウンセラー（植村高雄氏）が参加

1991

▲小林和夫　フィリピン派遣　ニュージーランドへ語学研修
▲漆原比呂志　カンボジア派遣　ニュージーランドへ語学研修
▲塚本涼子　フィリピン派遣
●女子パウロ会電話サービス「信徒の宣教だより」をJLMMが担当し、帰国者がメッセージをおくる（一月より毎月第四週のプログラムを担当）
●派遣者が参画するプロジェクトに対し、プロジェクト支援金をJLMMから供与開始。フィリピン・有川憲治の関わるOTEC（有機農業共同体）の活動に対して月額一万円を三ヶ月間。
○事務局による派遣候補地視察に研修生が参加（八月二十一日よりフィリピン、九月七日よりタイ）
○養成コースのプログラム改変　①短期集中コース、②公開講座、③カウンセリング・ワークショップ、④語学研修、⑤信徒使徒職活動、⑥各自霊的指導者をもつ、⑦共同体で構成
■事務局スタッフ　高橋ユリ着任（四月）、有川憲治着任（七月）

務局で働く、あるいはボランティアとして関わることにより、養成、派遣、現地支援の方法論が、より派遣の現実に根ざしたものとなる。信徒が会の実務的な運営を担い、担当司祭は会の霊的指導を担うことで役割の分担を試みる。シーゲル師に代わり、オリエンス宗教研究所所長のA・ブルカルト師が担当司祭に着任する。帰国した信徒が組織を支えるようになるまでの間、その基盤をつくることが目的であった促進会は、この時点でその役割を終える。

ムーブメントとしてのJLMMの誕生

この運動体に関心をもつものは、誰でも事務局会議にオブザーバー参加することができ、学生を含めた信徒たちが会の方向性、組織、広報、会の名称に至るまで、熱心に討論を重ねた。顧問の粕谷甲一師は、青年海外協力隊設立時の経験を活かし、特に会の運営・組織に関しアドバイスを与え、事務所の業務を海外課（要請班、海外ケア班）、国内課（総務班、国内ケア班）に分化すること、組織強化とNICE（福音宣教推進全国会議）のテーマでもある「開かれた教会」のために、「全教会的支援体制」の構築を提案した。

一九八七年二月二日の事務局会議には担当司祭、修道女、信徒の十九名が集まった。この日、新しい会の名称を

1992

▲崔本靖美　カンボジア派遣
▲白石澄江　カンボジア派遣
▲市川清子　フィリピン派遣
●「JLMMカンボジア・チーム」として活動を開始
○フィリピン長期研修（語学研修と生活体験、七月十五日から十月七日）
■事務局長　山口道孝師　五月着任、野村昌樹師　五月退任
●会則が検討され（九月二十四日運営委員会）、カトリック中央協議会・国際協力委員会において承認（十月二十一日）、施行される。
●事務局顧問三名（植村高雄、中村貴子、ブラザー・レイモンド）が選任され、月一回事務局業務に関して検討を行なう。
■事務局スタッフ　木村啓子、ポーリン・イレト着任

1993

ポーリン・イレト（事務局にて）

考えるにあたり、このグループはLay Missionaryの何であるか、すなわち、Program（プログラム、活動）か、Association（会、協会）か、Movement（運動体）なのかが話し合われた。結果、この三つの語から多数決でMovementが採用され、Japan Lay Missionary Movement、略称JLMMという英語名称が決定した（事務局会議議事録一九八六－八七より）。ここで、この会はムーブメント（Movement）という語を選択したことによって、何かを変えていくこと、動いていく、広がっていくという思いを会の名称に託す。

「信徒の宣教者」

これを受けて日本語名称をどのようにするかが話しあわれる。「レイ・ミッショナリー」という語を使用したいとの意見もあったが、「信徒」が「宣教」にでかけるという理念にこだわった。「宣教会」でなく「宣教者会」としたのは、信徒一人一人が宣教者であろうとする自覚を持ってゆきたいという願いからであった。日本語名称が「カトリック信徒宣教者会」に決定した。

四月、事務局と研修所が東京松原教会内の淳心会の旧学生寮へ移転する。「松原の家」として、派遣希望者を十分に受け入れられる環境と、活動の拠点が確保された。同時に共同生活を含めたコミュニティが形成されていく。

●カンボジア総選挙直前に、状況が緊迫し、バタンバンに派遣されている派遣者三名がプノンペンに避難。事務局スタッフがプノンペンを訪問、今後の見通しについて緊急会議（五月）
○養成コースを実施しなかった
●事務局が東京都江東区の日本カトリック会館六階に設置される。世田谷区松原の「信徒宣教者の家」は研修所となる。

1994

▲井爪謙治・光子　ベトナム派遣
▲坂野一生　カンボジア派遣
▲山下望　カンボジア派遣
▲押久保暁子　東京事務局派遣のちフィリピン派遣
●ベトナム政府の要請を受け、ホーチミン市ベトナム青年協会トレーニングセンターに日

カンボジアへの派遣者たち

呼びかけに応える

「意義がある、ない、あるいはどうこうではなく、もし、あなたが他の国の人々のことを考え、共に働いてみたいと思ったら、それは神の呼びかけの始まりかもしれません。勇気をもって、第一歩を踏み出してください。（高橋ユリ、派遣者、「たより」第6号）」

一九八九年四月、野村昌樹師が担当司祭（兼事務局長）に、西サモアから帰国した長島美詠子さんがスタッフに着任する。従来の養成コースに、よりオープンな国内学習会を年二回実施、各回十名ほどの希望者が集い、自分の召命について考え、お互いに深め合う場となる。

「自分を何も飾らないで、ありのままの自分を差し出す。ありのままの自分でいる。そこからすべてが始まる。たぶん神さまは、必要なものを与えてくださると思う。今の私には、いろいろな知識や技術を身につけて強くなるのではなく、何もないところで自分と、神と向き合う、そして変わっていくことが必要と感じています。それを神様は望んでいるし、そこに召命らしきものを感じます。（小林和夫　派遣希望者　第一回国内学習会にて）」

日本語教室卒業式（ベトナム）

本語教室を九月五日に開校（カリタスジャパン・アジアデスクとの協働プロジェクト）

●インド中部マハラシュトラ州大地震の被害と復興状況調査（カリタスジャパン）にカンボジアで活動中の坂野一生が派遣される（七月、一週間）

●森田隆がカリタスジャパン・ルワンダ難民救援プロジェクトに派遣される

○一年間休止した養成コースを再開（第十回）。四月十七日から一九九四年一月まで三十九週間。いままでで最多の八名の信徒の参加、うち五名が共同生活をおくる。

●JLMMカンボジアチームが、カリタスジャパンに新設されたアジアデスクとの協働プロジェクトとして、ローカルNGO支援活動を開始（四月）

自らが学び、変わること

派遣者が現地で何を学び取り、日本の教会に何を伝えたいのか。この問いに応えるために、フィリピンに派遣されている斎藤知子さんは、「感じたこと、特に信仰的なものを中心に、自分自身の内面の変化を正直に認めること。（斉藤知子ニュースレター（以下、NL）20号）」だという。

第三世界の教会の一員ではあるが、教員や看護師、マネージャーなどの立場で、実際には現地の人びとに何かを「教える」場面の多い派遣者に対し、シーゲル師はそれでも徹底して「教えられる・学ぶ」ことこそがこの運動の本質であると説く。「先進国の人が頭を下げて、今まで『遅れている』と見下していた民族のところに行き、『教えてください』と言わなければならない時になったと思う。（M・シーゲル師、「たより第6号）」パプアニューギニアに派遣された吉田勉さんは、「私にとって『宣教』とは『教えられること』でした。（「たより」第11号）」と言い切る。

学び、自分が変わること。「シーゲル神父様から教えていただいた事は『信徒宣教者の最終的な役割は、派遣中に変えられた自分が、帰国後、自分の身の回りから社会を変えていくこと、つまり神の国をこの世でつくっていくこと』だったと思うのです。（秋永秀子、派遣者、「たより」第6号）」ここに運動体としての意味と目的を見出すことができる。

1995

▲森田隆　カンボジア派遣

▲桝田英郎　カメルーン派遣

▲漆原加代子　ベトナム派遣

●初のカンボジア・スタディーツアー実施

●カンボジア現地スタッフのサクーンとチンダーが来日し、全国で報告会ツアー（北海道から広島まで、十一月十五日から十二月十五日）

派遣式（一月二十日）

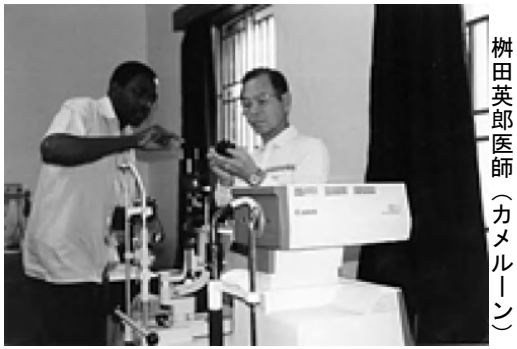
▲仁科浩　極東ロシア派遣

▲仁科貴子　極東ロシア派遣

▲米谷和江　ネパール派遣　フィリピン・イサベラにてプライマリヘルスケア研修に出発

●ポーリン・イレト極東ロシアにて状況調査と派遣調整、十月よりプロジェクト開始

○ネパール長期海外研修（八月二十三日から九月十六日）


桝田英郎医師（カメルーン）

人間の本質に触れる

「私たちはあらためて、創世記一章二十七節に書かれてある意味を確認することになりました。それは、人間は『神の似姿』であるということ。また、だからこそ神は他人の中に、異なった文化の中に存在するということ。私たちは共にそれを発見することができるということでした。（中島淳、帰国者、「たより」第7号）」派遣者の、現地での人びととの出会い、関わりの中に学びがあり、その深いところで人間の本質に触れる。人間の本質に神の働きを見る。このプロセスはおそらく体験によってのみ得られる。だから派遣者は言う。『海外宣教』とは《考える》ものではなく《体験する》ものなのだ。（長島美詠子、事務局スタッフ、「たより」第6号）」

日本の教会としての役割

時代は一九九〇年代に入る。戦後四十五年。アジア・太平洋諸国において「日本」が残した戦争の傷跡は癒されていない。派遣者たちは現地でそのことに直面する。フィリピンでは、「日本軍のスパイか」と疑われる派遣者もあった。「当会の宣教者たちは主にアジア・太平洋州に派遣されているため、活動中に戦争の惨事について現地の人から聞かされたり、反

■養成担当にシスター高木百世
■養成担当スタッフに政本純が着任（四月）
■運営委員　改編
運営委員長：野村純一司教、委員：竹内正也、R・ギング、梶川宏、兄部純子、茅根史男、辻垣正彦、政本博、山口道孝

1996

▲荒川治
ネパール派遣
▲長縄美也
カンボジア派遣
▲水野実香
極東ロシア派遣
▲吉井恭子
パラオ派遣
▲森井栄美子
ベトナム派遣
○ビルマ（ミャンマー）長期海外研修

ビルマ（ミャンマー）長期海外研修

日感情をもろに出されたりしています。初めのうちは謝るしかありませんが、親しくなっていくうちに、『日本人も残酷な人ばかりではない』『自分たちと同じように働き、生活している』、また『友情を結びに来てくれた』…とだんだん理解されるようになってきています。（NL29号）」

このような現状もあり、運営委員会では派遣地選定の優先性を検討した。結果、①日本の教会の方針とのかねあい…アジア・太平洋地域、②日本人の存在の重要性、③継続して同じところに派遣する、④リバース・ミッションの重要性を根拠に派遣地を決めていくこととなった（運営委員会、一九九〇年四月七日）。特に「歴史的に関わりのあるアジア・太平洋地域に力を入れるべき（六月十一日運営委員会）」とし、これまでの海外の教会からの要請に応えるという形から、「日本の教会」という意識のもとで積極的に派遣国候補の可能性を広げていくことになった。

「塚本さんらの仕事には、贖罪の意味もあるかもしれない。過去の教会の過ちと、現在の日本の過ちの償い。明るい彼女らに気負いは感じられないが、その自覚はあると思う」（岡本宗雄、ニュースレター「ミッション」、以下M、45号）一九九三年、フィリピンに派遣者を訪ねた支援者の岡本宗雄さんは、派遣者との出会いをこのように語った。

●横浜教区の青年、司祭、シスターのグループによるロシア・ウラジオストック教会の教会学校キャンプ・ボランティアに派遣者の仁科浩・貴子が参加（八月八日から二十二日、十二名参加）
●ベトナムのホーチミン市ベトナム青年協会・日本語センターにて二年間コース第一期生の卒業式（八月十一日、二十一名卒業）。井爪夫妻が製作した日本語教材「あいうえお写真集　ベトナム」が現地で出版される
●JLMMカンボジアチームが「JLMM／CJAD（Japan Lay Missionary Movement/Caritas Japan Asia Desk）」としてカンボジア政府に国際NGO登録し、カンボジア外務省と協力・支援に関する契約書を締結
○研修生とスタッフの夏合宿実施（長野県四阿高原神学生山の家）
■養成担当：シスター菊池陽子が「祈りの時間」、シスター野口百代が「自分と出会う」を担当（四月着任）
■運営委員長　池長潤大司教（国際協力委員会の委員長が交代）

故シスター野口

養成コースの見直しと目的の明確化

養成コースが開始された一九八四年以来、毎年その内容の見直しが行われてきた。特に体験学習として高森草庵（押田成人師）で「労働と祈り」、川崎の在日コリアン、山谷・寿町の日雇い労働者、千葉の滞日外国人労働者を訪問し、現場で直面している諸問題について知り、学ぶプログラムが盛り込まれていった。海外に派遣される前に、日本の現実をよく知っておくことが極めて重要であることがあらためて確認された。

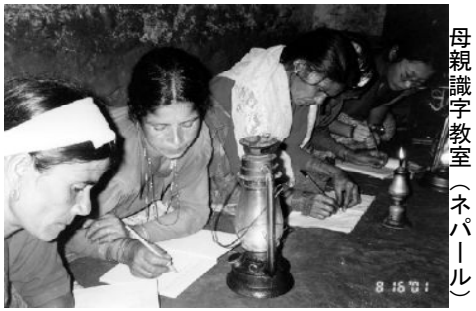
一九八九年からは、研修生が正義と平和協議会全国大会に参加したり、アジア学院にワーキングビジターとして農業研修（七月から一ヶ月間）するなどして、体験をさらに深めていく。

こうした経験を積みあげる中、一九九一年三月の運営委員会において、養成コースの目的は次のように明確化された。「信徒宣教者としての資質を養う。第三世界の問題などの知識や情報を集めるだけでなく、共同生活を通して、自分と異なる考え方を受け入れたり、自分自身と神との関わり（信仰を基盤とした生き方）を見つめ直す。また、将来力となる仲間意識を育てると同時に、日本の教会共同体から派遣されている意識を深める」（NL、333号）」

これを受け、一九九一年度の養成コースからプログラムが改

1997

▲山中努　派遣
▲斉藤妙子　フィリピン派遣
▲徳恵利子　ネパール派遣
●カンボジアでクーデター未遂事件が起こり、国内が混乱状態となり、派遣者がタイの国境から陸路で脱出（七月）
●　ミニ・チャリティコンサート（研修生企画、松原教会、八十名来場）
○「大地との対話」をテーマに祈りと労働（高森草庵、七月一日から七日）
○中国長期研修（七月二十三日から八月二十一日）二〇〇四年度まで毎年実施
■事務局スタッフ　シスター岩井美咲、西垣真子着任（四月）


母親識字教室（ネパール）

1998

▲棚町久美子　カンボジア派遣
▲柿山恵理　ベトナム派遣
▲吉浦京子　東ティモール派遣
▲三好由加　極東ロシア派遣
▲川里隆　カンボジア派遣
●カンボジア　プノンペン郊外のゴミ集積所ステン・ミエンチャイの調査を開始
●ネパール　現行の野菜作り、鶏銀行・豚銀行に加え、紙幣の原料になる「みつまた」の植林プロジェクトを開始

中国長期海外研修

1999

●カンボジアスタディーツアー（九月三日～十三日）
●秋のチャリティ・コンサート（十月三日横浜・二俣川教会）、ミニコンサート（十月十七日東京・西千葉教会）研修生による企画・実施
▲石丸奈加子　ロシア・イルクーツク派遣
▲小向いくみ　東ティモール派遣
▲高橋章子　ロシア・ハバロフスク派遣

編される。プログラムは一九九一年度の場合、①短期集中コース（六月二十日から七月十三日、講義と体験学習、信徒五名・修道女四名参加、講師十八名）、②公開講座（四月から七月までの金曜または土曜、全十二回の講義、のべ十五名の参加、講師十五名）、③カウンセリング・ワークショップ（植村高雄氏指導、一般参加可、全五回）、④語学研修（メリノール会・ブラザー・レイモンド指導、毎日）、⑤信徒使徒職活動（土曜または日曜、小教区にて教会活動に参加）、⑥各自霊的指導者をもつ、⑦共同体（松原共同体の住民は九名）で構成された。

宣教とは何か

養成コースでは、担当司教、海外宣教体験をもつ司祭・修道女、外国人宣教者、帰国した派遣者、信徒、NGOやカトリック団体などの協力を得ながら、その体験の分かち合いから学び、様々な角度から「宣教とは何か」を考える。

「『宣教』とは『神の意志と神の国を相互に探し求める対話』である（L・ギング師、養成コース公開講座、NL34号）」、「宣教とは、自分の文化の中にある宝の交換である（ヤン・スインゲドー師、養成コース公開講座）」

では、宣教者の生き甲斐は何か。講師のイエズス会士、エド・ネメシュ師は自らの四十二年間に及ぶ宣教体験から分かち合った。「何も言えない、何もできない無力さを実感した時、実際的な貧しさの中での生活、どれくらい「ばか」にされることに耐えられるか、この三つがキリストのために喜びとなる。それが宣教者の生き甲斐です。（一九九一年度養成コース講義、NL34号）」

より継続的、発展的な関わりを求めて

フィリピンに派遣され、帰国後横浜教区神学生となり、インドのプーナで三年間神学を学んだ山口道孝さんが、一九九一年五月六日司祭叙階され、一九九二年度より事務局長に着任する。事務局スタッフにフィリピンからマリア・ポーリン・イレトさんが加わり、海外との交渉や現地プロジェクト調査・立案・実施に貢献した。この新体制下では、今までの歩みを継承しつつ、会則や派遣契約書を整備するなど組織の強化と、派遣者の現地での関わりを、具体的にプロジェクト化することで継続的かつ発展的な関わりに変える取り組みがなされた。一九九三年には事務局を東京都江東区の日本カトリック会館六階に設置。世田谷区松原の「信徒宣教者の家」は研修所として使用されることになった。

▲辻明美　パラオ派遣
▲藤澤敦子　ネパール派遣
▲真下百合子　カンボジア派遣
▲安川奈保　ネパール派遣
○研修生、いままでで最多の八名が共同生活を経て、七名派遣
●東ティモール派遣準備：聖母訪問会、シスター亀崎善江支援グループとの協働で、AFMET（東ティモール医療友の会）を設立。JLMMがAFMETの運営委員会に参画し、事務局業務の一部を担う（五月）
●キャンペーン：パラオの使用済みバッテリー処理に関する技術支援の呼びかけ（十月）
●キャンペーン：中部ベトナム洪水緊急支援呼びかけ（一月）
●修道会との協働：ロシア・ハバロフスクでは、現地に派遣されている聖母訪問会の修道女、メリノール会司祭との協働でハバロフスク小教区の司牧活動に参画。

派遣式

関わりを具体的なプロジェクトに発展

二十年間の内戦を経てカンボジアに和平が訪れ、一九九二年四月、カンボジアへの派遣が開始された。この時期、破壊されたカトリック教会の再建や国の復興支援のため、主に欧米のカトリック宣教会や団体が多数参入していたが、カンボジアで活動するためには、すべての外国人宣教者に、国際協力NGOとしての政府登録と、身分をそこに所属するNGOワーカーとすることが義務付けられていた。JLMMが、カンボジアにおいて当初派遣していた在カンボジア国際カリタス（現・カリタスカンボジア）やICMC（国際カトリック移住協議会）から離れて活動するためには、JLMMがNGOとして独自のプロジェクトを持ち、継続的な人材の投入、資金的な裏づけも備えなければならない状況であった。JLMMはこれまで、現地の教会の働き手の一員として、現地のプロジェクトに参加するというあり方であったため、JLMMがプロジェクト運営に関与したり、活動資金を調達し現地で活用する動きもなかった。（ただし緊急災害援助などの支援キャンペーンは実施していた。通常のプロジェクト活動費に対しては、例外的に一九九一年にフィリピンで派遣者の有川憲治さんが関わるOTEC-有機農業共同体に対しプロジェクト支援金をJLMMから供与したのみであった）

この状況に対応するため、プロジェクト化のための調査・立

●派遣国・派遣者数最高：九カ国に十八名（一月）
■事務局スタッフ：漆原比呂志　着任

2000

▲山本悠子　パラオ派遣
▲鎌田頼子　カンボジア派遣
▲本橋奈々子　タイ派遣
●チャリティ・コンサート「チェロとパイプオルガン」十二月三日、横浜・雪ノ下教会
●東ティモール　AFMETリフェラルセンター開所式（二月十七日、参加者千二百名）本格的に活動を開始
●エキュメニカル：日本福音ルーテル教会東京教会の鎌田頼子が研修に参加（四月）、派遣（十一月）
●キャンペーン：カンボジア・ステンミエンチャイ地区ゴミ集積場の住民の生活向上キャンペーンを新聞などで呼びかけ

鎌田頼子（カンボジア）

案・実施支援、諸団体との連携強化とネットワークの拡大、個々の派遣をチーム化するなどの取り組みが意欲的に着手された。

プロジェクト化と可能性の広がり

カンボジアでは、現状調査から始まり、当時公に認可され始めたローカルNGOの支援、やがてJLMM独自のプロジェクト運営（プノンペン・ゴミ集積場における衛生教育）へとつながっていく。カリタスジャパンにプロジェクト支援申請を行い、「資金をカリタスジャパンが提供し、JLMMが人材と派遣のノウハウを提供する」という連携が始まる。

山口師とポーリンさんが「カリタスジャパン・アジアデスク」を担当することにより、この連携体制はより強化、他の派遣国にも拡大し、JLMMの関わりのプロジェクト化と派遣地の広がりが飛躍的に発展する。

一九九四年四月、カンボジアでは、「JLMM・CJAD（カトリック信徒宣教者会・カリタスジャパン・アジアデスク）」としてローカルNGO支援プロジェクトを開始、またベトナムでは政府の要請を受け、「ホーチミン市ベトナム青年協会・日本語センター」を九月五日に開校する。

この連携は、カリタスジャパンの緊急援助プログラムへの協力に発展し、インド中部マハラシュトラ州大地震の被害と復興状況

●キャンペーン：パラオ・ミンゼンティ高校への楽器提供を呼びかけ（二月）
■養成担当　シスター西川孝子着任
■事務局スタッフ：金山重之着任
●オリエンス宗教研究所発行の小学生向け雑誌「こどじか」に各国の派遣者がもちまわりで連載（四月より一年間）
●イースター献金を開始（三月）
●パラオと日本の交流：ミンゼンティ高校における日本語教室開始（外務省国際交流基金による教材の支援）、大阪府立和泉高校との交換留学

活動開始時の衛生教育（カンボジア）

2001

調査（カリタスジャパン）にカンボジアで活動中の坂野一生さんが派遣される（一九九四年七月、一週間）。またカンボジア派遣前の森田隆さんがカリタスジャパン・ルワンダ難民救援プロジェクトに派遣された。ベトナムでも派遣者が中部、北部、南部メコンデルタ地帯と毎年起こった台風と洪水による災害状況を現地から報告・支援要請し、援助活動を実施した。

一九九五年ポーリンさんが極東ロシアにて状況調査と派遣調整、十月よりプロジェクト開始。カンボジアで活動中の坂野一生さんと現地スタッフのチンダーさんが派遣され、プロジェクトの立ち上げを支援。CRS（アメリカのカリタス）とカリタスジャパンの協働プロジェクトであった。イルクーツクでは、「カリタスジャパン・ロシア支部」が設立され、現地カリタスの構築を支援した。JLMM派遣者が「ロシア支部」のメンバーとして活動した。

カリタスジャパンとの協働は、そのお互いの教会ネットワーク、人材面と資金面の相互協力によって、JLMMの活動の範囲、役割、可能性を一気に広げていくものであった。

チーム派遣と継続的な関わりが定着

カンボジアでは現地の事情により、派遣当初からチーム派遣であり、一九九六年の国際NGOとしてのカンボジア政府登録

●ロシア・スタディーツアー（七月三十日から八月六日）
●日本女子修道会総長管区長会（以下：修女連）生涯養成コース　カンボジア体験学習（第一回）を実施（七月十五日から二十四日）三年連続で実施
●JLMMレイミッショナリー会議　（九月二日から五日、タイ・サムイ島。全派遣者、研修生、オブザーバー二十八名参加）、サムイ島宣言を共有する
▲鈴木眞八朗
ネパール派遣
▲山崎敏子
カンボジア派遣
▲松田ルミカ
東ティモール派遣
▲シスター樫野寿美子（ショファイユの幼きイエズス修道会）
カンボジア派遣
▲シスター園田国子（ショファイユの幼きイエズス修道会）カンボジア派遣
●パラオ・スタディーツアー（二月二十七日から三月八日）

松田ルミカ（東ティモール）

を経て現在に至るまで、一貫して「JLMMカンボジアチーム」として、継続的に信徒が派遣され、プロジェクトも継承されている。これにより、新派遣者が、現派遣者や記録から現地の情報をかなりの程度まで得られ、また「派遣先で、一体自分は何をしたら良いのだろうか」という、これまでの派遣者が直面してきた悩みもある程度解消された。

活動の場所が離れているとしても、ロシア、ネパール、タイなどの派遣国では国ごとのチームがJLMMとしての分かち合いの場になり、方向性などについても話し合えるコミュニティとなったことで、派遣者同士がお互いに刺激しあい、励みとなっていた。

プロジェクト化による気づきと学び

チームによる派遣、プロジェクトの運営と実施という新しい局面は、開発プロジェクトである限り、その妥当性、効率性、持続可能性などが問われることになる。一定の計画のなかで、掲げた目標に向かって成果もださなければならない。現地の人びととの丁寧な対話が不可欠となり、プロジェクト関係者間の意思疎通も大切になってくることが、派遣者の成長を促しているだろう。現地の人びととの関わりを大切にしながらも、村などの地方行政や政府、関係諸団体、先進国の援助する側の人びととの交渉や協働という場面が、物事を

●JLMMカンボジア・スタディーツアー再開（三月二十五日から四月三日）二〇〇七年現在まで毎年数回実施
●修道会との連携：ショファイユの幼きイエズス修道会のカンボジアミッションのため現地における調査、調整、支援と派遣者の研修の協力
●カンボジアとネパールの女性グループ・スタッフのためのクロストレーニングを企画・実施（ベトナム・ハノイ市、ネパール・カトマンズ市にて、三月八日から十七日）
■養成スタッフ　シスター野口百代（聖母訪問会）帰天

レイミッショナリー会議（タイ）

多角的に見ることや、ダイナミックな動きにつながっていった。国際関係とその歴史、国家や地域の政策、国の中での活動地の位置づけと特有の文化、また現地の教会の動きを見ることは、視野を広げ、客観的な分析の助けとなるだろう。さらにプロジェクトを通して「見えやすくなった」活動を通して、日本の教会内外に現地の状況を伝える、分かち合う、協働を促すためのアピールにもつながった。

プロジェクトと「共に生きる」のジレンマ

しかし本来的には、JLMMの派遣者は開発プロジェクトの専門家ではない。プロジェクト活動経験をもっている人も少ない。だからこそ、プロジェクト実施に関わる派遣者には、プロジェクトの計画と実施に追われ、プロジェクトそのものの達成に気をとられ、そのプレッシャーを感じながら、「共に生きる」ことがはたしてできているのか、そもそも両立が可能なのか、悩む。

「私たちは助ける側と助けられる側という、人間が作りだした区分けを常に取り除く意識をもつ必要を感じます。それには、自分が助けられたという経験の中に、全ての人から全ての人〈渡される神の息吹を感じ続けることが何よりの道であり、生きる方向を示す恵みなのだと思います。（仁科浩、M61号）」

2002

●札幌教区青少年委員会主催カンボジアツアーを企画・実施（三月一日から十一日）
▲浅野美幸　カンボジア派遣
▲シスター黒岩あつ子（ショファイユの幼きイエズス修道会）カンボジア派遣
▲シスター松坂裕子（聖母訪問会）　ロシア派遣
●ネパール・スタディーツアー（三月二十五日から四月四日）
●機構改革：信徒による運動体として、カトリック司教協議会から独立
●ロシアのカトリック教会の活動環境が激変：聖週間とともに、活動が制約されるようになる
●カンボジア・カトリック教会の活動に参画：バタンバン司教の要請を受け、プルサト省コンポンルアン水上村教会における活動を開始（五月）、プノンペ

藤澤敦子（ネパール）

山口師は次のように説く。

「JLMMの姿勢として、①充分にあるから与えるのではなく、乏しく限られた中から喜んで分け合う姿勢、②私たちは、神と人間の単なる仲介者であるという姿勢、③蒔かれた種の中に思いを委ねる姿勢、④いくつかは成功し、いくつかは失敗するプロジェクトの進行や結果を気にする前に、そこにいる人々を大切にする姿勢、⑤キリストの道に従う謙虚な姿勢。（山口道孝事務局長、「自分自身に問いかけていますか」、M58号）」

プロジェクトが軌道に乗ってくる中で、単なる開発ボランティアではなく、信徒宣教者としての、JLMMメンバーとしての姿勢が問われる。中心は「共に生きる」こと。その「共に生きる」、すなわち「共に」問題解決していく手段として、プロジェクトにかかわっているということを肝に命じる必要がある。

現地と日本の人びとをつなぐ

現地の状況を、ニュースレター以外にも一時帰国時や任期修了帰国時に報告会、勉強会を通して日本の教会・地域社会に伝えてきた。派遣者を通して現地の状況や、派遣者が感じ、学んだことを日本の人びとに分かち合うことは、「リバース・ミッション」として、現地での活動と同じぐらい重要であるということが、養成において繰り返し強調されてきた。

浅野美幸（カンボジア）

ンではカリタス・カンボジアと協働事業であったステンミエンチェイにおける活動をJLMMが引き継ぐ（十二月）

●支援グループ設立…横浜教区藤沢教会に「カンボジア福祉基金藤沢」が設立され、カンボジアのコンポンルアン水上村の活動に継続的に支援を開始。

●OBOGのつながり…さよなら松原の集い

●修道会との連携…礼拝会によるカンボジア・ミッションの現地における調査、調整、支援

■事務局スタッフ…辻明美着任

■養成担当…シスター太田喜子着任

さらに、日本の人々が現地に派遣者を訪ね、活動や社会の状況を見てまわる体験学習ツアーの企画実施し、現地と日本の人々をつなぐための大きな役割を果たしている。一九八九年に企画（フィリピン）、以降九三年フィリピン、九五年・九六年・九九年にカンボジアへのスタディーツアーを実施、支援者の方々の理解を深めるとともに、ツアー参加者の中から派遣希望者がでるなどの展開があった。二〇〇一年からは精力的にスタディーツアーを実施した。二〇〇一年度にロシア、パラオ、カンボジア（三回）、二〇〇二年度ネパール、カンボジア（三回）、二〇〇三年度カンボジア（四回）、二〇〇四年度カンボジア（六回）と続く。二〇〇五年度からはベトナムとカンボジア、二〇〇六年度のタイとカンボジアなど、二カ国を回るツアーも企画された。一般募集を行うツアーに加え、日本女子修道会総長管区長会・生涯養成コース（二〇〇一年から二〇〇三年度まで毎年及び二〇〇六年度）、札幌教区青少年委員会（二〇〇二年度）、日本外国語専門学校（二〇〇三年度）、横浜雙葉中学・高等学校（二〇〇三年・二〇〇四年）、専修大学国際交流サークルSIA（二〇〇四年度・二〇〇六年度）、カンボジア福祉基金藤沢（JLMMカンボジア・コンポンルアンの活動の支援グループ、二〇〇四年度）など、団体や学校主催のツアーの企画・実施した。二〇〇六年からは旅行会社との提携で、中学生・高校生対象のカンボ

2003

▲山手雅子　ミクロネシア派遣

▲今井慶　タイ派遣

▲近藤周　東ティモール派遣

▲平西紀　カンボジア派遣

▲シスター東盛芳江（ショファイユの幼きイエズス修道会）　カンボジア派遣

●日本外国語専門学校（九月二十七日から十月六日）カンボジアツアーを実施

●横浜雙葉中学・高等学校（第一回、十二月二十日から二十六日）カンボジアツアーを実施　二〇〇四年度まで二年連続で実施

●ネパールでマオイストによる活動により治安が悪化。JLMMが活動するサンクワサバ省オクレ村のデイケアセンターの一部がマオイストに破壊される。JLMMは派遣の継続を見合わせることにした。

今井慶（タイ）

ジアツアーを実施している。支援者の輪が広がり、特に非信徒の方とのつながりと協働が始まっている。信徒・非信徒を問わず、スタディーツアー参加をきっかけにアジア・太平洋に関心をもち、活動を始めた人、自分の将来の進路を決めた学生、JLMMとの協働によりカンボジアで独自のプログラムを開始した修道会など、参加者一人一人のミッション、団体のミッションへと展開されている。

日本の人びとが、実際にアジア・太平洋の人と出会い、語り合う時間や場を提供することも重要だ。一九九五年十一月、JLMMカンボジア現地スタッフのサクーンさんとチンダーさんが来日し、北海道から広島までの各地で報告会ツアーを実施した。ポルポト政権下の体験、国の復興に賭ける気持ちを、カンボジア人自身が分かち合うことで、参加した人びとに深い共感を与えた。毎年実施しているチャリティ・コンサートではJLMMの活動紹介を行いながら、二〇〇四年久高島の「酋長」西銘氏による「島人」コンサートでパラオを紹介。日本に留学中のパラオ人学生がパラオ文化を紹介した。二〇〇五年十月開催の「JLMMチャリティ・イベント・イン 福岡」ではカンボジア・タケオ省の高校生十名によるクメール伝統舞踊とカンボジア・日本の高校生の交流の場を持つ。JLMM春の中学生・高校生対象スタディーツアー（二〇〇六年）では彼らの高校を訪問、交流を続けている。出会いとつながりが、

安川奈保（ネパール）

●カンボジア　プノンペンに活動拠点開設「JLMM子どもの家」開所（四月六日）
●カンボジアでのミッション再考：JLMMカンボジアと東京事務局スタッフによるJLMMカンボジア全体会議を実施し、活動の方向性を確認した（二〇〇三年一月、六月、十二月）
●ロシア：JLMM派遣者が、ハバロフスク小教区青少年サマーキャンプの要理の責任者となる。
●新規派遣国：ミクロネシアへ派遣開始
●カトリック学校との連携：横浜雙葉中学・高等学校の「総合学習の時間」の授業、学生による企画・活動を支援
●チャリティーコンサート、久高島酋長「島人」を四ツ谷、茅ヶ崎、横浜の三カ所で開催
○研修所を世田谷区松原から、コングレガシオン・ド・ノートルダム調布修道院「友愛の家」に移動
○調布研修所における研修を開始
○フランシスコ会伊藤隆師の伊那の農場で研修（二〇〇三年および二〇〇四年）

2004

▲杉村太郎　カンボジア派遣
▲泉純孝　フィリピン派遣
▲日笠山万希子　タイ派遣
●カンボジア福祉基金藤沢（十月二十九日から十一月五日）、専修大学国際交流サークルSIA（二月七日から十七日）、フィリピン・イラガン教区長グループ（二月二十一日から二十八日）、菊名教会青年（三月十一日から十八日）カンボジアツアーを実施
●ミクロネシア　日本時代の証言：二〇〇三年十二月から二〇〇五年三月までに十一の島にて百二十三名の調査・インタビューを実施した。

高橋章子（ロシア）

一人一人の意識を変え、やがては社会全体の平和に結びついていくと信じたい。

長期海外研修での学び

一九八四年から毎年実施されてきた養成コースは一九九三年に一年間養成活動を休止し、養成コースの見直しと、組織の強化を行った。派遣前のアジアでの生活体験が重視されるようになり、一九九二年度はフィリピンで約三ヶ月の語学研修と生活体験を実施した。九五年度はネパール、九六年度はビルマ（ミャンマー）、そして九七年から二〇〇四年度にかけては毎年約一ヶ月の中国長期研修旅行を実施した。中国研修では、限られた予算内で、中国大陸の広範囲を陸路で移動しながら、近代化による貧富の格差、文化大革命の傷跡、カトリック教会の現状を知るなど、いくつかの課題に取り組み、帰国後報告会を実施して発表した。研修自体は非常に過酷であったが、問題解決の方法、異文化を受け入れること、チームワークなどの体験が、派遣地での生活や活動において直接的に活かされ、励みとなった。

二〇〇五年度からは、派遣者が活動している国（カンボジア、タイ）において実地でJLMMの活動に関わりながら課題に取り組むインターン研修を実施している。派遣者との関わりから直接学べること、活動の実際に触れることが、派遣の準備や心構えのために有効であった。

国際協力NGOとしての活動展開

かつてインドネシア政府による制限で活動が困難とされていた東ティモールにおいて、カトリック系の団体は地道な支援活動を続けていた。聖母訪問会のシスター亀崎善江も医師として、一九九一年より東ティモールを毎年訪問し、医療活動を行っていた。現地の教会から、より本格的な支援の要請があり、それに応えるべく聖母訪問会とJLMM、そしてシスター亀崎を支援するグループが協働して、一九九九年五月、「東ティモール医療友の会（AFMET）」が設立された。JLMM運営委員の酒井信明医師が会長に着任する。山口師が一九九八年に現地視察し、九九年からJLMM事務局のポーリンさんが九月の騒乱期をはさんで現地に長期滞在し、プログラムを立案した。二〇〇一年二月にAFMETリフェラルセンターの開所式（千二百名が参加）を行い、クリニックとコミュニティ・ヘルスワーカー育成のための本格的活動が始まった。

JLMMとは別組織としてAFMETの運営委員会が組織され、現地にはJLMM派遣者、帰国者と一般公募による人材の派遣によって現地の国際スタッフが構成された。国際協力事業団（JICA、現国際協力機構）との委託契約により、プライマリ・ヘルスケア促進を軸とした三ヵ年ごとのプログラムを実

●AFMET（東ティモール）とJLMMカンボジアの合同でスタッフを対象としたワークショップを実施（フィリピン・カンボジアにて、四月）

●東ティモール　AFMET診療所：二〇〇四年度の診療者数が一万人を越える。雨期には平均二百人以上の患者が来所する。

●フィリピン派遣再開

●パラオ…日本統治時代を生き抜いてこられた方々から、日本時代の教育・生活・社会情勢などをインタビューした山本悠子が帰国後冊子を完成

●タイ　フィリピン・アテネオ大学のNatural Resource Instituteの村落調査に協力

●機関紙ミッション通算百号発行（五月）

■漆原比呂志　事務局長代行着任（七月）

伊那での農業研修

施している。

このような背景から、プロジェクト色の強い活動だが、AFMETを通して諸団体・個人との連携、東ティモールと日本の政府機関との協働の可能性を開き、一定の資金規模の下、派遣国の国・地方行政の保健政策にインパクトを狙えるまでの活動に展開できた意義は大きい。

エキュメニカルと諸宗教との対話・協働

二〇〇〇年度、日本福音ルーテル教会東京教会の鎌田頼子さんが研修に参加し、十一月カンボジアに派遣された。鎌田さんの参加を通じて、日本福音ルーテル教会の信徒の方々とカトリック教会が、ともにキリストの道を歩もうとする教会として協働できたことは、大きな恵みであった。

派遣国がカトリック国でない場合、派遣者の活動はすなわち諸宗教との対話と協働を意味する。「ネパールはヒンドゥの国。それは日常生活に深く浸透しています。神は形を変え、人間社会に入り、一緒に泣き、共に苦しみ、活き活きと働かれています（千葉博子、NL39号）」宗教の枠にとらわれない、神の姿を発見し、感じる。

タイは上座部仏教の国であり、JLMM派遣者の受け入れ

2005

●JLMMチャリティ・イベント・イン 福岡開催（福岡教区・大名町教会、十月二十八日）カンボジア・タケオ省の高校生十名によるクメール伝統舞踊とJLMMカンボジアの活動報告。

▲高橋真也　カンボジア派遣

▲佐藤邦子　東ティモール派遣

●JLMM二カ国ツアーを実施　ベトナム・カンボジアツアー（九月二日から十二日）

●中学生・高校生対象カンボジアツアー実施（三月二十七日から四月二日）

●戦後六十周年を迎えて、全派遣者より「平和のメッセージ」（八月、機関紙ミッション百七号で掲載）

●貧困問題の解決に向けた「ミレニアム開発目標」に取り組む「ほっとけない世界

派遣式　パーティーにて

先でもあるチェンマイDISAC（チェンマイ教区社会活動センター）のスタッフには敬虔な仏教徒も多い。社会と生活に生きている仏教の教え、慈悲や施しを体験から学んでいる。

カンボジアでも「お経の中の一節に『サンケアン・サラナン・ケチャーミ』、直訳すると『仏教の共同体に、この身を委ねます』と唱える部分があります。『人々と共に生きる』というJLMMの姿勢とも通じるものです（坂野一生　M60号）」と、仏教を知り学びながら協働の道を模索している。

JLMMとは何か　～サムイ島宣言

二〇〇〇年一月の時点では、九カ国に十八名が派遣されていた。派遣国・派遣者数ともにピークに達し、二〇〇一年、JLMMは創立二十周年を迎えた。

この年、九月二日から五日にかけ、タイ・サムイ島においてJLMMレイミッショナリー会議が開催された。全派遣者、二〇〇一年度研修生、オブザーバーを含む総勢二十八名が参加し、JLMMを再定義し、新しい取り組みについて検討提起した。結果は「サムイ島宣言」としてまとめられ、その後のそれぞれの活動に活かされていく。

「JLMMとは何か」について、各国で活動する派遣者が中心となり再定義を試みる。

「JLMMは、神の呼びかけを強く感じたキリスト者が、自ら

スタディーツアー（ベトナム）

のまずしさ」キャンペーンに賛同団体として参画（八月）。

●タイ　チェンマイ教区DISACにラフ族デスクが新設され、JLMM派遣者日笠山万希子がデスク担当者となる。

●タイ派遣者　YPD（Young People for Development）に参加。テーマは「持続可能で公正な開発」。アジア各国から六十名が参加。（ベトナム・ハノイ市、十一月二十六日から十二月二日、およびカンボジア・プノンペン市三月十六日から十八日）

●キャンペーン：カンボジア・水上村コンポンルアン教会と教室改築のための資金援助呼びかけ。バタンバン教区の要請に応え、建築費の半分をJLMMカンボジアを通じた日本からの支援で確保した。（三月）また「日本カトリック海外宣教者を支援する会」の援助で「通学船」を購入し、十月の新学期から十六名の子どもを公立学校へ送り出した。

の資質を生かし、派遣された地域での活動を通して、現地の人々と共に生き、祈り、キリストの精神を追求・実践し続けるムーブメントです。」参加者全員でこの一文を練り上げ思いを込めた。

新しい取り組みも提案された。いくつかの項目のうち、「派遣国間の共同プロジェクトの実施」については、二〇〇四年四月、AFMET（東ティモール）とJLMMカンボジアの合同でローカルスタッフを対象としたプロジェクトに関するワークショップをフィリピンとカンボジアで実施した。

「現地パートナーのクロストレーニング実施」も提案され、二〇〇二年三月、カンボジアとネパールの女性グループ・スタッフのためのクロストレーニングを企画、ベトナム・ハノイ市とネパール・カトマンズ市にて実施した。JLMMを通して、派遣国の人びとが国境を越えて異文化と出会い、新しい文化を創造するきっかけとなった。

「修道会と積極的に連携する」という提案も出された。二〇〇一年ショファイユの幼きイエズス修道会、二〇〇二年は礼拝会によるカンボジアミッションのため、現地における調査、調整、支援と派遣者の研修の協力を行った。

ロシア・ハバロフスクでは、現地に派遣されている聖母訪問会のシスター方との協働でハバロフスク小教区の司牧活動を継続した。

●カンボジア教育省との協力：教育省主催の識字大会にJLMM「子どもの家」から五名の子どもが参加。教育省提供のテレビ番組で「子どもの家」の活動を放映。

●カトリック学校との連携：福岡泰星中学校・高等学校の「総合学習」においてカンボジアの状況について、カンボジア高校生との交流会を実施した（十月）。

●スタディーツアー・訪問：カンボジア・プノンペンでは年間二十六組の見学者・取材を受け入れた。

○静岡の「ラルシュ・かなの家」に宿泊しながら、知的ハンディをもつ人びと（仲間）と生活するなかで自分と向き合うプログラムを開始（六月）。

○長期海外研修を一ヶ月間、JLMMが活動するカンボジア・タイにおけるインターン研修として実施（七月から八月）。海外研修報告会（九月）

平西紀（カンボジア）

司教協議会　公認団体として

二〇〇二年、カトリック中央協議会の機構改革により、同中央協議会から独立し、日本カトリック司教協議会公認団体となる。これを機に団体名称を「日本カトリック信徒宣教者会」に変更。顧問司教に池長潤大司教、担当司祭に山本遥師、運営委員長に促進会時代から長年尽力されている竹内正也氏が着任した。

これを受け、事務所を中央協議会から港区六本木（フランシスコ会聖ヨゼフ修道院内）に移転。事務局スタッフに、二〇〇〇年に着任した金山重之に加え、パラオ派遣より帰国した辻明美が着任した。（十二月）

また、「松原の家」は建物の老朽化のため取り壊すことになり、二〇〇三年度より研修所はコングレガシオン・ド・ノートルダム調布修道院の協力で、同修道院内「友愛の家」に移転した。

試練

二十五年の間、派遣者には様々な試練が待っていた。共に生きようにも、派遣先での生活・滞在すら困難な場面があった。

○牛久収容所（東日本入国管理センター）訪問や江戸巡礼、各種講義・集会参加など研修生の自発的な課外授業が企画された。

●二〇〇一年度研修生が中国長期研修の体験をまとめた「汽車に揺られて一〇〇〇〇キロ（尾崎陽子著、文芸社）」を出版（六月）

2006

▲重富浩子　カンボジア派遣

▲松本和歌子　タイ派遣

●カンボジア・スタディーツアー

修女連ツアー再開（第四回、七月十五日から二十四日）、ニコラバレ・グループ（八月七日から十四日）、JLMMタイ・カンボジア二カ国ツアー（八月二十一日から三十一日）実施

●ミレニアム開発目標達成のためのイベント「STAND UP！」に出展・参加（日比谷シティ広場、十月十五日）

●東ティモール情勢悪化：国防軍の元兵士らによるデモが四月二十八日、暴動に発展する。派遣者は五月三十日に国連のヘリコプターで任地を離れ、日本へ退避した。情勢が落ち着き、九月二十六日に再派遣。

●ミクロネシア日本時代の記録：派遣者山手雅子が「旧南洋群島トラック諸島で『日本統治時代』を生きた人々の戦後六十年目の証言～ごめんなさい　そして　ありがとう～」を編集、JLMMで自費出版。（六月）

カンボジア・タケオ省の高校生十名が来日

中高生スタディーツアーでタケオ省の高校を訪ねる

一九八八年、ネパール政府の在留外国人のビザに関する規定改定の結果、派遣者のビザ延長が困難になり、帰国を余儀なくされる。

一九九三年五月にはカンボジア総選挙直前に、国内の状況が緊迫し、バタンバンに派遣されている派遣者三名がプノンペンに退避。一九九七年七月に起こった国内の軍事衝突時は、派遣者がタイ国境から陸路で脱出した。

二〇〇二年、ロシアのカトリック教会の活動環境が激変。聖週間とともに、活動が制約されるようになる（四月十九日東シベリア教区の司教入国拒否など海外からの宣教者のビザ取得・延長が困難に）。これにともない、現地に派遣されている司祭の数が減少したため、司祭がハバロフスク市内の活動に専念し、聖母訪問会とJLMM派遣者が遠隔地を訪問する体制となった。また、定期的に訪問していたサハリンへのミッションについては、ユジノサハリンスク以外の地域の外国人立ち入りが禁止されたため中断される。

二〇〇三年、ネパールではマオイストによる活動により治安が悪化。JLMMが活動するサンクワサバ省オクレ村のデイケアセンターの一部がマオイストに破壊される。JLMMは派遣の継続を見合わせることにした。

二〇〇六年四月、東ティモールの国防軍元兵士らのデモが暴動と化し、緊迫した状態となる。日本外務省の退避勧告を受け、派遣者が任地を脱出。

タイの長期ビザ延長は二〇〇六年の政権交代により手続きが複雑化し、見通しが立ちにくい…。

これらJLMM派遣者に立ちはだかる試練の意味とは何であろうか。共に生きようとする者が、あくまで「よそ者」であることの自覚を迫られる。その中で、現地の人びとにどれだけ寄り添えるか。苦しみや困難を共感できるのか。

「彼らの苦しみと、その苦しみと闘う中で発見する感謝、喜び、希望は、キリストの苦しみ、死、復活にそのままそっくり重なる。その土台には、互いの弱さを知りつつも、互いを受け入れあおうという、信頼しあおうとする人間性があると思う。（塚本涼子、M44号）」

「実際に派遣されると様々な問題に直面します。しかし、十字架の道を歩み、復活の栄光に与ったキリストを探し、キリストに出会う良いチャンスだと考えています。（今井慶、M100号）」

二十五年の歩み

世界の人びとと「共に生きる」ことを実践しようとしたものたちが、神に、現地の人びとに、関わるすべての人びとに「共に生かされた」二十五年。「共に生きる」という生き方そのものが、福音（良き知らせ）になるということに気づかせても

■運営委員会　人事改編

顧問司教：池長潤大司教、名誉運営委員長（顧問）：竹内正也

運営委員長：茅根史男、副運営委員長：酒井信明、運営委員：山中努、シスター大田伊杜子、小林誠、石井孝子、シスター緒方真理子

監事：徳修、荒川治　事務局長：漆原比呂志（兼運営委員）

らった二十五年間。キリストの生き方にその源泉を求め、これからも共に歩み続けたい。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

二十五年の歩みを、多くの方々、特に小林由加さん（ＯＧ）の協力を得ながら、振り返ってみました。一年ほど前から、シーゲル師、山口道孝師、野村昌樹師や、もと事務局の徳永瑞子さん、山科さんご夫妻、野村美詠子さんなどの方がたから活動当時のお話や今の思いを伺う中で、この運動体が、本当に多くの人たちの信仰、努力、熱意によって支えられてきたのだと実感しています。

この二十五年間を限られた紙面で語り尽くすことは到底できず、出来事に対する私の見方に偏りがあったり、現存する資料の数に限界もあり、ＪＬＭＭの貴重な一歩一歩を網羅・整理しきれなかったことをお詫びいたします。今後時間をかけてじっくりと、ＯＢＯＧや関係者を交えて、さらにまとめていくことができればと思います。

この年表や本文に現れない大勢の人たち、すなわち運営委員、講師、研修・派遣中にご指導くださった方々、協力者の方々、事務局スタッフや現地のパートナー、現場で共に生きた人々など全員のお名前とその働きについて記述できなかったことを大変心苦しく思っています。関わった全ての人、お一人お

一人の関わりが、この歩みのために必要でした。

ここに記述された、何かの活動の始まりの後には、いつもそれを継続していく人、終わらせる人の苦労や困難があったはずですし、眼に見える動きの影に、目立たなくとも確かな関わりが常に存在していることも感じるのです。

ここには現れない、声にならない声、言葉にならない思い、今も解釈・整理できない体験こそが、実はこの歩みを支えてきたのかもしれません。

そして何よりも重要なことは、この二十五年の歩みは、底の部分で、忍耐と信頼と祈りをもって支えてくださった後援会員をはじめとする支援者の方々、お一人お一人が成り立たせてくださっていたということです。心より感謝申し上げます。

（漆原比呂志）